

令和3年度入学式の学長式辞

草間俊之

はじめに

新潟中央短期大学の入学式は、自分にとって、未知なる世界への第一歩、確かに恍惚と不安の二つがあったように思う。

式辞は短大用にバージョンアップを図るべくあれこれ考えたが、結局、12年間の高校長職のいつもの定番、「1人1人が、自ら常に意識して、感性を磨き、自己を律し、謙虚に学び、教養を身に付けてほしい」と自戒を込めて、若者への期待を語った。

中短生には、現代のように「公」と「私」の振り子が大きく「私」に振れている、不寛容で先行き不透明な時代にあっても、常に意識して、感性を磨き、自己を律し、謙虚に学び、教養を身に付けて、豊かな人生を送ってほしいと願って已まない。

式 辞

今日ここに、世界が、未だに新型コロナウイルスへの対応に追われている中であって、規模を縮小しながらも、学校法人 加茂暁星学園、令和三年度 新潟中央短期大学 第四十一回入学式を実施できますことを喜ぶとともに、御理解、御協力をいただいた皆様に感謝いたします。

ただ今、本学への入学を許可された七十名の新入生の皆さん、そして保護者の皆様、本学への入学、誠におめでとうございます。在校生、教職員一同、皆さんの入学を心から歓迎いたします。

これから始まる二年間の皆さんの学びは、人生における「業学一如」を目指し、「このためのために、子どもとともに、学びつづける保育者」となるためのものであります。

そのために、今、ここに、気持ちを未来に向かって切り替え、「これから、自分の未来は、自分で切り拓くぞ」と強く決意するとともに、「自分の未来への責任は、全てこれからの自分にある」と覚悟を新たにしたいと思います。

本日は、業学一如の体現を目指す皆さんに、三つの期待を語ります。

一つ目は、感性を磨くということでもあります。

感受性豊かな青春時代に、優れた音楽、美術、文学など、本物にできる限り多く触れ、心が揺さぶられるような経験を繰り返し、素直に感動できる、しなやかな心を育ててほしいと願っています。

二つ目は、自己を律するということでもあります。

地球は自分を中心に回ってはいません。学校生活や社会生活には、自己を律すること、乃ち、一定の我慢が必要です。自分に我慢を強いて、我儘を抑え、他人の悲しみや心の痛みが分かる心根の優しい人であってほしいのであります。

競争社会、格差社会ともいわれ、寛容になれという不寛容が蔓延る時代だからこそ、自己を律し、他者を思いやり、差別を許さず、内なる傍観者を撃ち、日本文化本来の正義に基づき行動できる人であってほしいと期待しています。

三つ目は、謙虚に学び、教養を身に付けるということでもあります。

教養は、個性の中核を成し、自己を自己たらしめるものであります。また、バイアスやマニピュレーションに打ち克つ強力な武器でもあります。専門分野は勿論のこと、科学や哲学、芸術や文化など森羅万象に渡って、飽くなき知的好奇心、知の探求心をもって、知識を吸収し、自分の頭で考え、自分の心で感じ、自分の言葉で語り、知と格闘してほしいと願っています。

皆さん一人一人が、自ら常に意識して、感性を磨き、自己を律し、謙虚に学び、教養を身に付けることは、本学園の建学の精神、業学一如、そして、学び続ける保育者の体現を目指すものであると確信しています。

さて、保護者の皆様、蛇足ではありますが、子育ての醍醐味は終わりました。子どもの本学への入学は、子離れのはじまりのときであり、子どもの自立には、保護者の皆様の子離れが、必要不可欠であります。

結びに、保護者の皆様、そして御支援をいただいております同窓会、雪椿会の皆様をはじめ、新潟中央短期大学関係各位に、より一層の本学園への御理解と御支援を御願い申し上げ、今日から始まる新入生の学園生活が、実り多いものとなることを大いに期待して式辞といたします。

令和3年4月3日

学校法人 加茂暁星学園 新潟中央短期大学長 草 間 俊 之